

「耕雲紀行」注釈(一)

稲田利徳

解説

南北朝・室町時代の著名な歌人耕雲(花山院長親)に「耕雲紀行」(仮称)と称される紀行文学作品が現存する。

この紀行文は応永二十五年(一四一八)九月、將軍足利義持の伊勢参宮に随行した耕雲が、翌二十六年春に、義持の命を受け、自詠などを織り込みながら、紀行文に仕立てて献上したものである。

「耕雲紀行」の伝本は後述するように、東京大学史料編纂所本が孤本であること、その本文翻刻も、夙く『大神宮神宮参拝記大成』(昭和十二年六月刊)に掲載されてはいたものの、特殊な叢書であったため、広く研究者の目に触れることもなかったこともあって、これまで等閑視されてきた。けれども、近年、改めて『神道大系 文学編・参詣記』(昭和五十九年三月刊)にも収録され、比較的入手しやすくなった。また、道中の風物や出来事と著者の儒教・仏教思想の融合した内容は、中世紀紀行文学作品のなかにあっても格調高く、滋味深い作品とみなしてよい。ここに史料編纂所の許可を得て、全文の注釈を試みるゆえんである。

なお、東京大学史料編纂所蔵本「耕雲紀行」(貴41・2)の書誌は次の通りである。

縦二三・〇糎、横一六・三糎。粘葉装写本一冊。表紙は仮綴のまままで、題簽貼付もなく外題なども記されていない。本文料紙は鳥の子で、墨付二六枚、奥付一枚。一面は八行、和歌は本文より二〜三字下げで一首二行書。所々に虫損が存するが、判読に支障をきたすほどではない。末尾に「應永廿六年春書之／耕雲山人(花押)」と奥付が存する。書写年代はこの奥付の室町中期頃の古写本であり、しかも耕雲自筆本とされる、極めて貴重な写本である。因みに写本は、現在桐箱に収められているが、箱蓋裏には朱紙で「耕雲紀行一冊」、それともう一枚、小杉楳邸の朱印を捺した紙片が貼付されており、小杉楳邸旧蔵本であったことが判明する。

なお、史料編纂所には「耕雲紀行」(二〇一三一三五〇)と題簽を貼付した袋綴写本一冊も所蔵されているが、これはその末尾に、

右耕雲紀行

東京市牛込區二十騎町二十八番地小杉美次郎氏所蔵／明治四十四年十二月

影写

とあるように、明治になって小杉本を忠実に臨写した本である。

この作品には元来、著者自身による特別な作品名がつけられていなかったかもしれないが、先の桐箱の朱紙をはじめ、『国書総目録』『日本古典文学大辞典』の辞典類、あるいは、翻刻されている『大神宮神宮参拝記大成』『神道大系』など、すべて「耕雲紀行」としている。この書名由来には特別な根拠があるわけではなく、また、旅日記を「紀行」と称するようになったのは、江戸初期、扶桑拾葉集の編纂頃からの見解もあるように、当代の書名としては相応しくない。が、ここでは便宜的に通称に従っておきたい。なお「親長卿記」(文明五年八月四日の条)に「耕雲参宮記、并百首草紙之内遺焼田許了」とみえるが、この「耕雲参宮記」は、本書と同作品の可能性もある。

「耕雲紀行」をいち早く翻刻収載した『神宮参拝記大成』の業績は特筆すべきものだが、十余箇所ほど誤刻がある。『神道大系』の方は、より厳密に翻刻されているが、それでも和歌などに三箇所ほど不審な翻字がある(これは注釈の際に触れる)。しかし、翻刻本文の右側に読解の便宜のため、()を付して漢字宛や人物指示がなされたところもあり、また末尾には、十余箇所ほどではあるが、簡単な補注も付加されており参考になる。

なお、南北朝・室町時代の伊勢参宮記には、康永元年(一三四二)十月の、坂十仏の「大神宮参詣記」(群書類従神祇部)、応永三十一年(一四二四)十二月の足利義持に随行した、飛鳥井雅縁の作と推測される「室町殿伊勢参宮記」(統群書類従紀行部)、永享五年(一四三三)三月、足利義教に随行した、堯孝の「伊勢紀行」(群書類従紀行部)などがあるが、各々に近似した道程を経ているので、地名その他、「耕雲紀行」の注釈に際しても、適宜参照してゆきたい。

注(1) 井上敏幸氏「祐徳稲荷神社『如法寺殿道之記』—解題と翻刻—」(文献探究、第十六号、昭和六十年九月)。中川文庫所蔵。

凡 例

- 一、本稿は耕雲の紀行文「耕雲紀行」の注釈である。
 - 一、底本は東京大学史料編纂所蔵本(貴41・2)で、次の方針に従って校訂本文を作成した。
 - (1) 漢字・仮名を原則として通行の字体に変え、新字体のある漢字はそれを用い、濁点、句読点を施した。
 - (2) 底本の仮名を漢字に改めた場合は、表記を改めた本文の右側に、もとの仮名を記した。漢字の訓みを()の内に示したものもある。
 - (3) 仮名遣いは原文のままとし、送り仮名を補った場合は()内に記した。また歴史的仮名遣いと一致しない場合は、()を付して歴史的仮名遣いを傍記した。ただし、仮名に漢字を宛てた場合は、これを省略した。
 - (4) 反復記号は底本のままとし、踊り字の場合はもとの仮名に直し、右側に「」を付した。
 - (5) 底本の丁数などは省略し、本文も適宜改行した。
 - (6) 虫損などで判読するのに、やや支障をきたす箇所は□とし、その中に推定した文字を記した所もある。
 - (7) 本文の不審な所には、(ママ)を付した。
 - (8) 全体を適当な個所で区切り、通し番号と内容に即した見出しを付した。
- 一、注釈は「本文」「語釈」「通釈」「考」の順序を進める。
- 一、「耕雲紀行」の翻刻を御許可くださった東京大学史料編纂所に対し、厚くお礼を申し上げます。

* * * * *

〔耕 雲 紀 行〕

一 参宮への遠巡

応永廿五年の秋廿日余りの比より、例も起こる脚氣の病にかさ

れて、起居も叶はず。枕席を離るる事なくて、長月の十日比に及びぬ。

有為虚妄の残質、すでに七十路に余れり。惜しみとどむべきにあらざといへども、日夜辛酸の精神をもちしなふとて、都のほとりに知るよしありて、薬湯をくはだつころ、相府より御使あり。廿一日伊勢御参宮の事あるべし。もし敬神の志あらば、このつゝに思立つべきにやとなり。一年兩度に及びて参詣せしに、度毎に信心勝りて、幾度も詣でまほしきに、かかる仰せ言は神慮の感通するにやと覚ゆ。さりながら、いまだ行歩も叶はず、心神も安きことなし。もし今ちとなをざりなる躰にも侍らば、かならず参すべきよし申(し)て、十一日より湯治を始む。十三、四日の比より、足の痛み重りて、身を動かす事もたやすからねば、此(の)事なかばは思(ひ)絶えて、神慮にも背きけるにやと慚愧きはまりなし。十六日にや、古歌に「足引の病」とつづけたるは、大かた山とつづけむためばかりの枕詞なるを、今の足のいたはりに、ふと思ひよそへられて詠み侍(り)し。

鈴鹿川この瀬に立たば足引きの病もさのみ恨みざらまし

〔語釈〕○応永廿五年の年—西暦一四一八年。称光天皇の御代。後小松院が院政をとっていた。將軍は第四代足利義持。○仲秋—陰曆八月の異称。○脚氣—乱脚の氣。脚疾。ビタミンB₁の欠乏症。末梢神経を犯して下肢の倦怠や知覚麻痺をきたす。○枕席—枕と敷物の意。寝具。用例「以前に天平二年庚午夏六月、帥大伴卿、忽に瘡を脚に生して枕席に疾み苦しみき」(万葉集・卷四・五六七の左注)。○長月—陰曆九月の異称。○有為虚妄—「有為」は因縁によつてつくられた生滅変化するもの。「虚妄」は真実でないこと、いつわりの意で共に仏教語。ここは仏教的見地からみた、仮りの世に存在する、有為無常の身である作者自身を指す。○残質—この語は『大漢和辞典』『仏教語大辞典』(中村元著)などにも見出されない。身体に病氣などのある者を「残疾」というが、ここは

それと同意か。要するに「有為虚妄の残質」とは、作者が我が身を仏教的見地から卑下したもの。○すでに七十路に余れり―耕雲の没年は「薩戒記目錄」によつて、正長二年（一四二九）と確認できるが、享年は未詳。応永二十五年（一四一八）に七十歳とするが、これは誕生の年に示唆を与える。なお「考」参照。○辛酸の精神―辛く苦しい気持。○やゝしなふ―底本を尊重し、「しなふ」を「撓ふ」と解してみたが、意が通じ難い。「神道大系」の翻刻でも「やゝしなふ」と「ゝ」が「衍力」と不審を提示している。今、これに従い、「やゝしなふ（養ふ）」と解しておく。○知るよし―所領地があつて、用例「むかし、をとこ、うひかうぶりして、平城の京、春日の里にしるよしして、狩に往にけり」（伊勢物語・第一段）。○薬湯―薬を入れた風呂。また、治療のために浴びる温泉。○相府―大臣の唐名。こは足利義持を指す。義持（至徳三年二月十二日）応永三十五年一月十八日、享年四十三）は、足利義満の子。足利四代将軍。勝定院。文芸を好み、耕雲・堯孝らの歌人を厚遇、応永年間に多くの歌会を主催。『新統古今集』にも六首入集。○伊勢御参宮―伊勢神宮への参宮。伊勢神宮は三重県伊勢市にある皇室の宗廟。皇大神宮（内宮）と豊受大神宮（外宮）との総称。皇大神宮の祭神は天照大神、御霊代は八咫鏡。○敬神―神を敬う。用例「夏道尊_レ命、事_レ鬼敬_レ神而遠_レ之、近_レ人而忠焉」（礼記・表記）。○一年兩度に及びて参詣せしに―義持に随行したかどうかはともかく、耕雲は以前に少なくとも二度にわたり伊勢参宮を体験したとする。このことはこの紀行文にも追想的に記述されている。○度毎に信心勝りて―伊勢神宮に参詣するたびに神に対する信仰心が募ってきた意。「両聖記」（耕雲の著）にも「祖宗をまもり法道をたすけますべき神慮にや、縁遇時いたり、機感相応するにこそと、信心いよ／＼深きによりて」とみえる。○神慮の感通―義持から誘いを受けたことを、自分の思いが神に通じた意。○行歩―あゆみ、歩行。○心神―こころ。精神。用例「心神の開朗にあること、泰初が月を懐くがごとし」（万葉集・巻五・八六四）。○なをさりなる躰―病気がそれほど重くない状態。○湯治―温泉に浴して病気を治療すること。○慚愧―恥じ入ること。罪を恥じること。慚は心に自らの罪を恥じること、愧は自らの罪を人に告白して恥じ、罪の許しを請うこと（仏教語大辞典）。○古歌に「足引の病」―物のたうびける女のもとにふみつかはしたりけるに、心地あしとて返事もせざりければ、又、つかはしける／葦引の山ひはすともふみかよふあとをも見ぬはくるしきものを」（後撰集・恋二・大江朝綱朝臣）の歌を指す。「山ひ」に「山居・病」、「ふみ」に「踏み・文」、「あと」に「足跡・筆跡」を掛ける。○大かた山とつづけ

むためばかりの枕詞なるを……―「あしひき」という言葉は、普通は特に意味はなく、「山」に続けるだけの枕詞であるが、この古歌のように「やまひ」に続けているのは、今の自分の足を曳きする病氣と関連して、ふと思ひ寄せたの意。○「鈴鹿川」の歌―「鈴鹿川」は伊勢国の歌枕。飛鳥・奈良時代は加太連山に発し、現在の関西本線に沿って蛇行する加太川の溪流を指していたらしい。「鈴鹿川八十瀬……」と詠まれた。「この瀬」は「川の瀬」と「この機会」の両意。「立たば」は出発する意も込める。

「通釈」応永二十五年八月二十日過ぎ頃から、いつも起きる脚氣の病に冒されて、起きたり座したりすることも出来ない。寝床を離れることもなくして、（その状態が）九月十日頃にまで及んだ。

生滅変化して実体もない我が病身も、すでに七十歳の齡を越えた。惜んでこの現世に留め置くべきほどの身ではないと思うが、日夜毎の苦痛の思いを勞ろうとして、都の近くに私の知行所があり、そこで薬湯の治療を試みようとした頃、相府（足利義持）から御使者があつた。二十一日に伊勢神宮に御参宮のことがあるらしい。もし神を敬う気持があるならば、この機会に参宮を思い立つのがよからうとのことだった。

先年、二度にわたつて参詣したが、その度毎に神への信仰心が募り、幾度でも参詣したいと思つていたときとて、このようなお誘いを受けるのは、私の思いが神の御心によく通じたためかと思われる。しかしながら、まだ歩くこともままならず、気分も安らかではない。もしも、今少し、病の苦痛が治まった状態になったならば、必ず参加したい旨を申し上げ、十一日から湯治を開始した。十三、四日の頃から、足の痛みはますます激しくなり、身体を動かすこともままならぬ状態になったので、参詣のことはなからは諦めて、神のおぼしめしにも、背いてしまふことになると思い、このうえなく我が身を恥じたことである。十六日のことだったか、古歌に「足引の病」と詠み続けたのがあり、普通、「足引の」は「山」に続けるための枕詞であるが、（この古歌のように「病」と続けているのは）今の自分が足を曳きする病氣と関連して、ふと思ひ寄せて、次の和歌を詠んだ。

鈴鹿川の川の瀬ではないが、この機会に参詣を思い立つならば、足を曳きするこの病も、それほど私を恨むことはないであろう。

「考」○「耕雲紀行」の冒頭部分は、作者耕雲の脚氣の病の状態から起筆される。ここには、將軍義持から伊勢参宮随行の勧誘を受けた際の、敬神への思念と歩行もままならぬ病との間に、旅立ちを逡巡する作者の苦悩と焦燥感が、

簡潔な叙述の背後に透視される。○將軍義持が応永二十五年九月に伊勢参宮に旅立ったことは、「廿一日。雨降。室町殿今日伊勢参宮。御共公卿北畠大納言。日野中納言。左大弁宰相時房。殿上人永藤朝臣。定親朝臣。経興云々」(看聞御記)などの記録類にもみえる。因みに、義持の伊勢神宮への信仰は厚く、頻繁に参宮を試み、少なくとも十六回は数えられるという。耕雲はこれ以前に二度にわたり伊勢参宮を行なったというが、恐らくそれも將軍に随行したものではなからうか。ただし、それがいずれの年のものであったかは未詳。義持將軍の伊勢参宮の様子は、応永三十年のものが、東洋文庫蔵「義持公参宮記」(神道大系)、応永三十一年のものが「室町殿伊勢参宮記」(続群書類従)などによって窺見できる。○応永二十五年に耕雲は、自分の齡を「すでに七十路に余れり」と記す。耕雲の没年は正長二年(一四二九)七月十日だが(薩戒記目録)、享年が不明なので生年も不明確である。岩佐正氏の説を受けて、福田秀一氏は「花山院長親の生涯と作品」(『中世和歌史の研究』所収)で、「北野社十五首歌」などの資料より、正平五年(一三五〇)の出生と仮定して伝記を記述している。それに依拠すると、応永二十五年(一四一八)は六十九歳となる。六十八、九歳を「七十路」ということはあるが、ここは「七十路に余れり」と明示しているので、正平五年生誕説は再考を要するだろう。

二 旅立ち、そして逢坂へ

十七日、湯より出づ。足の痛み少しうすくなりて、心神もいささかとり直す躰なれば、神慮もいまだ捨て給はざりけりと頼もし。

廿日の夜より雨いたる降る。いまだ自らの立居もたやすからぬやうなれど、寅の時ばかりより、旅の出立ちす。

一年丹後の久世の戸御出での時も、**相国寺**などの尊宿達あまた同道ありし時、老拙も驥の尾に従ひき。泊りく／＼にても、御立の前の日の曉寅の時ばかりより出(で)立ちて、松明にて二刻ばかりは暗き山路を越えし事、今の心地す。いつも御参詣の時は、大名近習已下数千人の上下の人数の多さに道もさりあへねば、かく急ぎ立つなるべし。曉月夜なるべき比なれど、雨いたる降りて、道の程いづくとも見えわかず。からうして逢坂に着

きぬ。松明の光に関屋のあたりも、そこにやと見ゆ。

逢坂の杉の下蔭過ぎかねぬ深き雨夜の明け暗れの道

「語釈」○心神——に既出。○神慮——に既出。○二十日の夜より雨いたる降る——参宮出発の前日の夜から雨が降ったことは、「廿日。晴。夜雨降」(看聞日記)、「廿日。丁卯。降雨」(滿濟准后日記)などで確認できる。○寅の時——今の午前四時頃。またその前後約二時間。○一年丹後の久世の戸御出での時も——丹後の久世の戸——は京都府宮津市久世戸。天橋立の南対岸周辺をいう。当地の五台山智恩寺の文殊堂は諸人の信仰を集め、將軍足利義満なども頻繁に参詣している。耕雲が將軍義持に随伴して「久世の戸」にでかけた「一年」とは、応永二十一年(一四一四)八月のことを指すと思う。それは「滿濟准后日記」の「(応永二十一年八月)廿二日辰公方様丹後御方向。京中御乗馬云々。新御所御供奉。大名少々供奉歎」(同)廿八日戌公方様自丹後還御。御路次間毎事無為云々。珍重々々」などの記事でも確認できる。○相国寺——京都市上京区にある臨濟宗相国寺派の本山。山号は万年山。詳しくは相国天禅寺という。京都五山の一つ。永徳二年(一三八二)に足利義満の建立。足利歴代將軍の帰依を受けた。○尊宿——年たけた徳の高い僧侶。用例「御門徒の尊宿いにしへのみことのをたがへず」(兩聖記)。○老拙——作者耕雲のこと。○驥の尾に従ひき——「驥尾に付す」に同じ。蒼蠅が駿馬の尾について千里も遠い所に行き着くように、後進者が秀れた先達につき従って、事をなし遂げること。「史記」(伯夷伝)に「顔淵雖三蘄学、附驥尾而行益顯」とみえる。○御立の前の日の曉寅の時——將軍義持が発する前日の「寅の時」に旅立ったこと。今度の伊勢参宮の出発と重ねる。○松明——松の脂の多い部分、または竹・葦などをたばね、火をともして照明に用いたもの。「ついまつ」とも。○二刻——一昼夜を十二支に配当している時刻の名。一刻は今の二時間に当る。○大名——管国を自分の私領化した守護。守護大名。○近習——主君の側近くに仕える者。○上下——身分の上位のもの下位の者。○曉月夜——夜明け近くになって月の残っている空のさま。またその月。○逢坂——近江国の歌枕。山城国と近江国の境をなす逢坂山の南側峰に行く坂道。今の滋賀県大津市。○関屋——逢坂にあった関所。平安時代は鈴鹿の関・不破の関とともに三関の一つとされた。○「逢坂の」の歌——「杉」と「過ぎ」は同音効果をねらう。「明け暗れ」は夜明け方の、まだ少し暗い頃。

〔参考歌〕「こえて行くすぎの下みちあけやらで鳥のねくらき会坂の関」（嘉元百首・藤原冬平）、「逢坂のせきはあけぬといでぬれどなほみちくらしすぎの下かげ」（風雅集・冬・藤原定宗）、「逢坂の関をばすぎの木のしも山あひくらき曙のそら」（室町殿伊勢参宮記）。

〔通釈〕十七日に湯治から出て来た。足の痛みも少しやわらいで、気分も少し回復した状態だったので、神もまだ私をお見捨てにはならなかったと頼もしく思った。二十日の夜から、雨がたいそう降っている。まだ、私の身体の動作も思うにまかせない有様だったが、寅の刻限ほどから、旅立ちの支度をした。

先年、(將軍義持が)丹後国の久世戸にお出かけの際も、相国寺などの高僧達を大勢同伴なさった時、老残の私も尊い御一行の後に付き従った。各々の宿所でも、御出立の前日の曉の寅の刻限ほどより出発し、松明をたよりに、四時間ほど暗い山路を越えて行ったことが、つい近頃のここのような気がする。いつも御参詣なさる時は、大名や側近に仕える者以下、数千人の身分の上下の者が随伴する人数の多さのため、道も避けることができなくなるので、このように早く出発するのである。いまは有明の月の出る頃ではあるが、雨がたいそう降っていて、道中、どの辺りを行っているのかも見分けられない。やっこのことと逢坂に到着した。松明の光で、関屋のあるあたりも、そこだろうかと思える。

逢坂の杉の木蔭のあたりを通り過ぎて行くのに難渋することだ。ひどく雨の降る夜明けの暗い道中で。

〔考〕○足の苦痛もやわらぎ、結局耕雲は参宮を決意して旅立つ。彼がこれほど伊勢参宮に執着したのは、単に神に対する信仰心だけによるものではなからう。將軍という最高の権力者の恩顧に依るといふ追従心が背後に貼り付いていたのではなからうか。南北朝の動乱の中で、南朝から北朝へと渡り歩いた耕雲には、権力者の庇護を受けることが、自己実現への道でもあることを痛感していたに違いない。出発の前夜から降り始めた晩秋の雨の音を聞きながら、立居もいまだ十分とはいえない老残の身で、早曉に旅支度を整えるシルエットは、どこか寂しい陰翳をおびているように思われる。○耕雲は、応永二十一年の將軍義持の丹後国の久世戸行きに随行したようだが、西胤俊承の「眞愚稿」(『五山文学全集第三巻』所収)に、その時のことを念頭にしたと思われる偈韻があるので、次に紹介しておく。

次畔雲陪相公遊丹之天橋偈韻

台星移次度遙空 金錫追飛丹壑風

九世廓通隨歎念 三祇修煉咲勞功
沙頭月照清涼界 海上燈分帝釋宮
一偈長留傳盛事 須知史筆在僧中

三 勢多の唐橋を経て草津へ

大津・粟津のあたりより、夜少ししらみわたる。程なく勢多に着きぬ。先年の参詣の時、二度ながら大津より舟に乗りて、矢橋といふ所に着きしかば、この橋をもよそに見渡しにき。今日ぞ初めてここを通る。

限りあれば今日こそ渡れよそながら我が目にかけてし勢多の唐橋

晴れやらぬながめの末は絶えはてて霧立ちわたる勢多の長橋

いまだ午のはじめ程に草津に着きぬ。先に参る人の中にも、はやここまで着けるもあるべし。当国の守護佐々木の六角の某、ここに待ち申(す)めり。愚拙は阿弥陀堂にうち休めり。見めぐらせば、雑人ども、このあたりの道の傍に集る居て、昼の乾飯に心を入れてひしめくなり。

旅人の秋の草津の乾飯を盛る椎の葉は色もかはらず

〔語釈〕○大津―今の滋賀県大津市。琵琶湖の西岸に位置、古くから交通の要衝として繁栄。○粟津―今の天津市膳所粟津町。○しらみわたる―明るくなる意。用例「春の夜のあけ行く空は桜さく山のはよりぞしらみそめける」(玉葉集・春下・三条入道左大臣)。○勢多―今の大津市瀬田。琵琶湖の南岸、瀬田川の東岸に位置。○先年の参詣の時、二度ながら―先にも「一年兩度に及びて参詣せしに」とみえる。○矢橋―今の滋賀県草津市矢橋。矢馳・矢走・箭橋とも書き、「やはし」とも呼ばれた。琵琶湖南部・東岸に位置。○この橋もよそに見渡しにき―「この橋」は瀬田川に架けられた瀬田の唐橋。「瀬田の唐橋」(長橋とも)は近江国の歌枕。耕雲は過去二度の伊勢参宮の際は、大津から舟で矢橋に渡ったので、この著名な歌枕の橋を渡らなかつたという。○「限りあれば」の歌―「限りあれば」は生命には限度がある意。時に耕雲は七十余歳。「よそながら我が目にかけてし」は、「この橋もよそに見渡しにき」を受け、直接渡らずに

舟から見た体験を背景とする。「かけし」は「橋」の縁語。○「晴れやらぬ」の歌―「ながめの末」の「ながめ」は「長雨」と「眺め」の掛詞。「ながめの末」は遠望の行きつく果ての意で、京極派歌人にみえる措辞とされるが、ここは同じ南朝歌人師兼の「つれづれのながめの末もうづもれて谷かげくつき五月雨のそら」(師兼千首)が用例として近似する。「立ちわたる」は「橋」の縁語。○いまだ午―底本「いまためうま」と「め」を見せ消ちにする。○午のはじめ―午の時は、今の正午、およびその前後約二時間。ここは午前十一時ころか。○草津―今の滋賀県草津市。早くから陸上交通の要地。東海道と東山道の分岐点に当る。○当国―近江国。○守護―鎌倉・室町時代の職名。守護職。○佐々木の六角の某―江州佐々木氏は嫡家信綱の後、六角と京極の二流となる。ここは佐々木満高(応永二十三年十一月十七日逝去。享年三十八)の長男佐々木満綱を指す。満綱は「佐々木系圖」(統群書類従巻第百三十二)によると「大膳大夫・法名宗岱。號龍雲寺。文安三乙丑正廿三於威徳院自害」とみえる。○愚拙―作者耕雲を卑下したもの。○阿弥陀堂―阿弥陀如来を安置した堂だが、具体的には未詳。足利義持が祈願寺としていた、草津市の常善寺(浄土宗・本尊は阿弥陀如来)の可能性がある。○雑人―身分の低い人。下賤な者。○乾飯―炊いた御飯を乾燥させたもの。旅行の際に携えた。○ひしめく―混雑しておしあう意だが、ここは乾飯をひしひし音をたてて食べている様子。用例「ひし／＼とたゞくひにくふ音のしければ」(宇治拾遺物語・第十二話)。○「旅人の」の歌―地名「草津」に「秋の草」を連鎖掛詞とする。「椎」はブナ科の常緑広葉樹。椎の葉に飯を盛る歌は「家なれば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る」(万葉集・巻二・有間皇子)にみえる。「参考歌」「枕にもたれかむすばむ冬がれの草津の里は霜深きころ」(室町殿伊勢参宮記)。

「通釈」大津・粟津のあたりから、夜が少し明るくなった。まもなく勢多に着いた。先年の参詣の際は、二度とも大津から舟に乗って矢橋という所に着いたので、この橋もよそから見渡しただけに終わった。今日という今日、初めてここを通る。

この先の余命も幾ばくもないので、今日こそ渡ったことよ、これまでよそから眺めるだけで気にかけてきた勢多の唐橋を。

晴れあがらない長雨のため、遠くの眺めの果ての視界も絶えてしまい、勢多の長橋の辺には霧が立ち渡っていることだ。

早くも午のはじめ頃に草津に到着した。先発した人のなかにも、はやこま

で(將軍一行を)待ち申し上げているようだ。私は阿弥陀堂で休息した。下賤な者どもは、この辺りの道のほとりに集まって座し、昼の乾飯を一心にひしひし音をたてて食している。

旅人が草津で乾飯を盛っている椎の葉は秋の草葉のように色も変らないことよ。

「考」作者耕雲は、これまで二度の伊勢参宮の際、大津から乗舟して矢橋に着けたので、歌枕で著名な「勢多の唐橋」を直接踏み渡ったことがなかったという。今度の参宮で初めて唐橋を通る感慨が二首の和歌に盛り込まれている。「限りあれば」の歌には、余命も乏しくなった身で、ようやく唐橋を踏み渡った感動が溢れている。そこに歌道に精進してきた人の数寄心と執念が背後に揺曳している。「晴れやらぬ」の歌は、せっかく渡りながらも、霧雨のために橋を眺望できない不満も窺えるが、霧と共に渡り行く我が身に情趣も感じているのであろう。

四 水口から鈴鹿山越え

日暮らしの雨に道も遠き心地して、申の時ばかりに水口といふ所に着きぬ。ここには佐々木の京極の加賀守待ち奉るなり。

神にはや向ふ心の濁らぬはここやよるべの水の水口

暮るる程より雨晴れて子丑の時より月差し出づ。いく程なく例の松明にて出づ。前野といふ野にて、在明の月隈なくおもしろし。

吹きをくる風ぞつらき一むらの雲の前野に在明の月

夜明けてみれば、いづくにか稲干したる所にて、

八束穂の御稻刈り干し君が代の秋にあふみの民ぞにぎはふ

近江と伊勢との境は、はや鈴鹿山のうちなり。峻しき敵、大行の險も思

(ひ)やらるる道分け下りて、こなたをば坂の下といひて、宿屋一村あり。

昔もここを通りしに、この度は殊に老の数にうちそへたる病の名残りいと苦し。

昔より猶数まさる年越えて苦しき老の坂の下道

〔語釈〕○日暮らしの雨―一日中降る雨。○申の時―今の午後四時頃、およびその前後約二時間。○水口―今の滋賀県甲賀郡水口町。県の南部、甲賀郡の中央に位置。○佐々木の京極の加賀守―佐々木高数のこと。「佐々木系圖」によると、「四郎左衛門加賀守、左馬助、法名道統。嘉吉元年六月廿四日赤松亭討死。號満願寺。」とみえる。○「神にはや」の歌―「神」は伊勢神宮の主祭神天照大神を念頭にする。「よるべの水」は「依笠の水」で、神前の庭前に据える瓶の水で、神霊が寄り、御影をそこに映すといわれる。用例「さもこそはよるべの水に水草めめ今日のかざしよ名さへ忘るる」(源氏物語・幻)。「水口」は地名に田の水の引き入れ口をも込める。○子丑の時―今の午前一時頃。○例の松明―「例の」とは、すでに「松明の光に関屋のあたりも、そこにやと見ゆ」とあるのを受けたため。○前野―今の滋賀県甲賀郡土山町前野。野洲川北岸の平坦な地域。ここで晴れた空の有明の月を賞美しているが、「室町殿伊勢参宮記」でも「前野と申す野は、まことにはるくく見えて、月もやうく晴れぬるにやと見え侍る」と類似の光景を描写している。○「吹きおくる」の歌―地名「前野」に「雲の前」を掛ける。「嵐ぞつらき」とは、嵐が「一むらの雲」を月に吹き送くるのを、つれない所為とみる発想。○「八束穂の」の歌―「八束穂」は八握りの長さの穂。よく実った稲穂の称。用例「神世よりけふのためとやつかほにながたのいねのしなひそめけむ」(新古今集・賀・権中納言兼光)。「御稻」は稲の美穂。「あふみ」は「君が代の秋に逢ふ」と「近江」との掛詞。「にぎはふ」は富み栄える、豊かなさま。背後に將軍義持の治政を賞美する。○鈴鹿山―伊勢国の歌枕。今の三重県と岐阜県の両県と滋賀県との境をなし、南北に走る山脈。○大行の險―「大行」は「太行」で、中国の河南・河北・山西省にわたる大山脈で、古くから險阻をもって名高い。「参考」「將登太行雪滿山。閑来垂釣碧溪上。」(李太白詩集・卷二・行路難)。○坂の下―今の三重県鈴鹿郡関町坂下。近江国から鈴鹿峠を越えて伊勢に入った最初の地。「夜あけぬれば坂の下につきぬ。そのあたりちかき所に、御ひるの御まうけありて、御逗留のよしきこへ侍るを、しばしやすらひ侍りにき」(室町殿伊勢参宮記)などと、峠を越えた休息地として諸書にみえる。○「昔より」の歌―「老の坂」と地名「坂の下」とを掛ける。「昔より……」とは、以前に参宮へ出かけた時よりも、いっそう齢を重ねた意。

〔通釈〕一日中降る雨のために道中も遠い気がして、申の時ほどに水口という所に到着した。この地では佐々木京極加賀守が(御一行を)待ち申し上げていた。

この地にいたり、早くも神に参拜に向う私の心が濁らず清浄になるのは、ここが依笠の水のある入口という名の水口だからであろうか。

日が暮れる頃から雨が晴れて、子丑の時より月が出て来た。まもなく(水口を)、いつものように松明をたよりに出発した。前野という野で、一点の曇りもない有明の月が見えて情趣深かった。

前野の空に澄む有明の月の前に、一むらの雲を吹きおくる嵐は、なんとつれないことよ。

一夜が明けてみると、ここはどこであろうか、稲を刈り干した所で、よく実った稲穂を刈り干して、ここ近江の民人達は、君が代の実りの秋にあつて豊かに栄えていることだ。

近江と伊勢との境は、もう鈴鹿山のうちである。険しい大岩が聳え、まさに太行の險阻も連想されるような道を分け下って行くと、ここを坂の下といって、宿所が一村あつた。その昔もここを通過したが、今度はことに老齡に加え、病みあがりの身で、大そう苦しかった。

以前ここを越えた時よりも、いっそう齢を加えた老いの身で、この坂の下の道を越えるのは苦しいことだ。

〔考〕○雨の中、老齡の身で辛苦の旅を続けて、ようやく水口に到着する。ここで詠じた「神にはや」の歌には、天照大神への信仰心の表白とともに、歓待してくれた佐々木高数への挨拶も込められているのではなからうか。○「八束穂の」には將軍義持への追従心が顯著である。たわわに実った稲穂を干した光景を見ても、農民への労苦への視点はなく、治政安穩と民の豊かさを結合させる発想を駆使している。○將軍一行を、草津では佐々木満綱が、また水口では佐々木高数が接待している。大勢の將軍一行を迎えるに際して、守護たちの気遣いは辛苦をとまなうものであつたらう。「耕雲紀行」には、そういった接待の様子は詳記していないが、応永三十年の義持の参宮記を記録した「義持公参宮記」(広橋兼宣の執筆)には、その辺りも詳しく叙述されている。因みに、水口での様子は「路次風雨為之如何、凌風雨著水口宿、京極加賀守送賀着。旨酒一也、公私賞翫之、家主又進酒肴」と記録されている。(未完)

(平成九年四月八日受理)